

# 本郷勝夫さん

1923(大正12)年8月30日生まれ  
当時の本籍地 宮城県  
陸軍 衛生兵  
第13師団第1野戦病院  
最終階級 上等兵  
華中・華南(湘桂作戦)



- 1943(昭和18)年11月 第3乙種だったが召集
- 1944(昭和19)年1月 南京に上陸、3月 徒歩で第13師団第1野戦病院到着

## ●1944(昭和19)年4月より 湘桂作戦参加

●栄養失調で入院してきた兵隊に、お粥といったって、太平洋汁と言ったんだけど、米が糊のようなものしか支給できなかった。おかずは塩。1合の塩を1斗缶に溶かして、いくらかしょっぱいかなという程度。

●野戦病院というのは、病人を治療し、治すところではない。上海とか南京とか看護婦のいる病院は病院です。ただ作戦中の野戦病院は、病院じゃない。死ぬのを待つための受け取りの場所だった。薬はない、包帯はない、ないづくしだから何にもできない。軍医はただポヤーンとしているだけ。

衛生兵だけが忙しい。ご飯を炊いて食わせたり。薬は栄養失調には粉糠(ぬか)。糠味噌に使う糠を包んで渡す。ビタミン不足を補う。ちょっと余裕があるときには、水に溶かしてかき回して澄んだ上澄みを水薬といって、飯盒の蓋で飲ませるのが薬。米糠は大変な貴重品だった。そういう状態で、患者は生きられない。病院に入院したと言ったってそのような状態で、食べ物がないんだから生きられるわけがない。

●患者は担架に乗せられてきても、担ぐ兵隊と中国人の苦力(クーリー)が担ぐんだけど、担架の棒が肩に刺さる。夏なんかは患者を素っ裸にする。担ぐ方がきついから。病院に来るときは素っ裸。何にもまとっていない。

●手術道具を持っていても、手術するといっても、飛行機が飛んでくるから、天幕張ってなんてとんでもない。それに1人や2人ではない、何十人と出るんだから。医者も時間はないし、器具はないし、火は燃せないから消毒ができない。ナイフづくしだから、傷ついた患者を一時預かって、衛生隊という患者を運搬する隊に渡して、また前進というのが野戦病院だった。傷ついたり、弱ったりした兵隊を一時預かるだけ。ただ死ぬのを待っているだけ。残酷物語そのものですよ。

●コレラが流行った。コレラ菌が体内にはいると、脂肪と水分がみなくだる。3日ぐらい経つと、プクツとした顔がシワシワの顔になる。そして水がたまらなく欲しい。上海とか漢口あたりの大きい病院ならリンゲル液を補給するが、戦地で自分の水もないのに……。

コレラに感染した病人が来ると部隊長命令で、お前たち衛生兵、将校以下全員、患者にさわるといふ命令を出す。感染した病兵が百人ぐらい集まって来るとどうにもしようもない。患者は頭はしっかりしている。「衛生兵殿、水くれえー、水くれえー」と閉じこめられた格子から手を出す。自分がうつるからさわったらだめだって、部隊長命令で。水を与えちゃだめだって。水を与えて治すのが衛生兵。さわったらお前たちにうつって、部隊が全滅するからさわるといふ命令。

そうするうちに師団司令部から、どこそこの野戦病院は前進という命令がくると、コレラ患者を一つの部屋に入れておいて、十人ぐらいの兵隊が残って、周りに藁と薪をおいて、その家を燃して、生きたまま火葬にする。戦争というのは、そういうものですよ。ほんとに残酷物語。

## ●野戦病院は狙われた

野戦病院の部隊は、後方を歩くもんだから狙われるんです。「土匪(どひ)」と当時は言っていたけども、住民の自警団にね。向こうは分かっているんです。後方からくるのは火器を少ししか持っていないと。向こうも物が欲しい。兵隊は持っているから。

後方部隊にはいろいろある。野戦病院以外に、病馬倅、防疫給水部といって、中国の生水は飲めないから水を濾過する役目です。後からついて行く後方部隊は苦労しました。前にいる歩兵部隊が荒らすものだから、後から行った部隊は食べ物がない。本科の歩兵部隊は、命の交換をするから、略奪したものは豊富にあった。

- 1945(昭和20)年8月18日 敗戦を知る

(取材日:2005年6月27日)